

報告

三周年記念祭

平成 27 年 12 月 2 日（水）10 時より高山神社で、開創三周年記念祭が開催されました。200 名の方々が一年の無事に感謝し、来る年の安寧を祈りました。



笄摺（おいずる）を着て参加

案内

観梅祈願祭

日時:2016 年 2 月 20 日（土）13 時から
場所：結城神社 社殿・梅園にて 幸せ祈願祭
美しい梅園でひとときをお過ごしください。

入園料：500 円



伊勢の津七福神 H28年の催し

- 2 月 3 日（水）「鬼押さえ節分会」津観音寺 10 時～16 時
“七福神” アンテナショップ（手作りグッズなど販売）開催済
- 2 月 20 日（土）《観梅祈願祭》結城神社 13 時～14 時
〔 2 月 20 日（土）～3 月 13 日（日）結城神社 〕
開店：土・日のみ 手作りグッズなど販売
- 7 月 7 日（木）《七夕祈願祭》津観音寺 19 時～20 時
- 10 月 8 日（土）～9 日（日） 「津まつり」津観音寺
“七福神” アンテナショップ（手作りグッズなど販売）
- 12 月 2 日（金）《伊勢の津七福神 開創四周年記念祭》
初馬寺 11 時～12 時

美しい花と紅葉のご案内

- 6 月初旬～7 月上旬（沙羅双樹の開花期）円光寺
- 11 月中旬～12 月中旬（紅葉の境内）円光寺・四天王寺



開創 3 年、巡拝者も **2200** 名を越えました。
昨年 11 月、河芸町の早崎有紀さんが、祖父の健康を願って巡拝されました。2000 人目。



寺社秘話シリーズ

■津観音寺のお地蔵様

岩鶴密伝（副住職）

境内のなかでひとときわ目を引く大きなお地蔵様（延命地蔵菩薩）の像。この仏様、頭部と胴体で製作された時期も国も違う、というのはご存知でしょうか？頭部は朝鮮、胴体は日本、俗にいう『ニコイチ』なのです。石段の部分には、明治から大正にかけて津市で活躍された政界・財界人の名が多く刻まれております。

その後、昭和二十年七月二八日の津市大空襲において、連合軍による新型焼夷弾投下による直撃を受け、右肩に大きな穴が空いてしまいました。この空襲による被害は凄まじく焼失率は全国一といわれ、市街建造物の堂宇も一夜にして全て灰となりました。焼失したのは観音寺の山内寺院七ヶ寺、観音寺



本堂と大宝院本堂を含む四十一棟を全焼し、国宝や重文を含む多くの文化財も失われました。幸いにも仏像本体は焼失を免れた

こと、そして辺り一面焼け野原のなか、この仏像のみがぽつんと立っていたことから、多くの写真に記録されており、津市の戦災被害の慰霊シンボリックな一面もございます。

戦前の立派な津観音、空襲による壊滅、そして戦後の復興から現代にいたるまで、変わることなく見守ってくださるお地蔵さま、いったい何を想われているのでしょうか？今でも毎日手を合わせる人が後を絶ちません。

『平和と感謝の祈り』毎年7月28日（津市大空襲の日）



寄稿

■伊勢の津七福神さまのお徳を求めて

友の会会員 藤岡美也子

菜の花が咲き桜の花びらが散る頃となりますと、いつも思い出しますのは、20年程前に友人と2人で40日間かけて歩いた四国八十八ヶ所歩き遍路の旅です。

道中町の人々の”おせったい”優しいお言葉と優しい目に疲れた心と体が癒されました。宿坊では、若い修行僧に出迎えられ温かい眼差しとお心に接した思いが懐かしく思い出されます。

そんな折、津の街発展を願って、四天王寺東堂様発案開創されました、伊勢の津七福神めぐりに出会い感銘致しました。

四国は遠い、40日も大変、二度三度いや七回は廻れると嬉しく心が弾みました。

菜の花の咲くのどかな田園風景の榊原地蔵寺、しだれ梅の香に誘われて結城神社、沙羅双樹の清純な白い姿に吸い寄せられて円光寺へと、初馬寺、四天王寺、高山神社、津観音寺は歩いて津の中心部へ。東堂様の願った街おこしに協力して昼食やゆっくりお茶をして、店々を覗き、楽しく語らい人と人の和（輪）も広げましょう。

七福神友の会の友人と2人菅笠、白衣、金剛杖で歩きました。街の人々は不思議そうに見ていらっしやいましたが心洗われる引き締まった気持ちで四国八十八ヶ所歩き遍路の旅を思い出しながら黙々と歩きました。



バスに乗って移動した時には、運転手さんはとても親切で乗客の人々は珍しい物を見るように目を伏せていらっしやいました。

神様に守られて、仏様に導かれて、神様に助けられて、仏様に生かされて、この幸せを感じるひとときを大切に感謝して。伊勢の津七福神のお徳を求めての霊場めぐり、身も心も癒される小さな小さな旅にお友達を誘って出かけましょう。

寄稿

■ジャネット妙禅デルポートさんのこと

作野史朗（三重大学名誉教授 元鈴鹿医療科学大学長）

長らく無住であった実家の曹洞宗の菩提寺に、ご住職がご夫婦で来て下さったのは、25年ほど前のことで、それ以来私は本堂でご本尊を拝んだ後、ご住職のお話を聞かせて戴くのが慣いとなっていました。20年くらい前のこの日も、ご住職はいつものように私を庫裡に招いて下さり、いま県内の曹洞宗のお寺に行っていて不在だが、と前置きされて、「かつてカナダで知り合ったジャネット・デルポートさんが当寺に滞在している、この方は、カナダの森林保安官をしていた方で、30歳の頃離婚、苦勞しながら女手一つで子供さんを育ててきた。離婚を機に曹洞宗の座禅に興味を持ち、機会あるごとに参禅してきたが、次第に曹洞宗の教えに魅力を感じずようになり、子供さんも独立したので、日本で曹洞宗の教えを学びたい、との思いで退職して来日、各地の曹洞宗のお寺を巡って修行している」と話してくれました。



ご住職は以前にも、永平寺での修行志願の少年を預かれ、「永平寺での修業は”今どきの子供”にとっては酷しいから、永平寺に入る前に預かって、修行に耐えられるように心身をならしておくのだ」と言っておられたことを思い出し、その女性も、多分そうなのだろうと思っていました。

それから2～3か月経ったある日、私の心を揺さぶる事が起きたのです。ご住職とジャネットさんが私の家に来られ、ジャネットさんから、自著「関大尉を知っていますか」という本をいただきました。

太平洋戦争末期の日本では、国を護るために多くの若者が特攻隊員となって、戦場に若い命を散らしました。終戦後は日本人の私達ですら、話題に乗せることを避ける風潮があった特攻隊、その神風特攻隊「敷島隊」の司令を務め、多くの特攻隊員に先駆けて散った、関行男



海軍大尉の事を、戦争当時は敵国であったカナダの女性に取り上げて本にした、ということは私にとってショックであるとともに、大きな感動をもたらしてくれました。読んでみて、この女性は、当時敵国であった欧米諸国の人々から、「カミカゼ」と言われて恐れられた特攻隊の若い将校が、実は妻を気遣い、父母を思いやる、人情溢れる優しい心情の持ち主であった、ということの人々に伝えたいのだ、ということがひしひしと胸に迫ってきました。

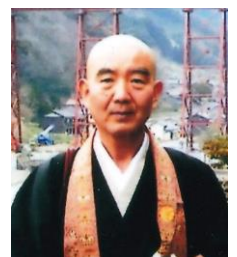
子供のころから、我が家は昔からの曹洞宗を信じている、と教えられていましたが、称名は多くの仏教が「南無阿弥陀仏」なのに、曹洞宗では「南無釈迦牟尼仏」だ、座禅が大切なのだ、質素を旨とし、きらびやかなことを嫌うのが曹洞宗だ、という程度の認識しかなかった私の胸に”「曹洞宗の教え」をもっと知りたい、道元禅師が著された「正法眼蔵」を読みたい”という灯を灯してくれた瞬間でした。

ご住職は10年ほど前に入寂され、ジャネットさんの消息を聞かせて戴けなくなりました。実家のお寺では、ご住職のお身内の和尚様が、通いで守って下さっています。

■私の中の澤木興道老師

臨済宗東福寺派大泉寺住職 衣斐弘行

私が子供の頃、鈴鹿市徳居町の天台宗真盛派の真照寺さんで老師の講話会が開かれていた。父はその会に都合が叶うと伺って臨済と曹洞の違いはあっても同郷の先輩老師に畏敬の念と関心を持っていたようだった。講話の内容を父は子供たちにも話したのだろうがまったく憶えていない。ただひとつだけ当時老師のことを「宿無し興道」と呼ぶ呼称には「老師に失礼だ」と憤慨した口調で語ったことだけを何故かはっきりと憶えている。もっともこの呼称は老師の法話録「禅談」が「大法輪」に連載のころ担当記者が命名したことも仄聞するが確かなことは知らない。父は私が高校一年のとき遷



化しているので今になると当時のことを少しでも聞いておけばよかったといささか悔やまれる。

興道老師の殊に誕生から幼少期における津や一身田での出来事は今日なかば伝説化していて、それらは老師自身が語る自伝本に負うところが多い。ただ、この自伝本、初め『禅の生涯』(昭和 26 年誠信書房)の題で出版されその五年後の昭和 31 年に『禅に生きる』と改題、更に昭和 41 年に『禅に生きる 沢木興道老師』として再販、それが昭和 59 年文庫版化に際し『沢木興道聞き書き—ある禅者の生涯』(講談社学術文庫)とタイトルが変遷していて、このあたりも如何にも「宿無し興道」らしい気がしないでもない。

ところで後年『日本名刹大事典』(平成 4 年雄山閣)を編むときお世話になった平松令三先生から興道老師のお話を伺ったことがある。平松家は高田本山専修寺出入りの



旧家で先生は龍谷大学教授で高田教学や親鸞研究の碩学。老師が鈴鹿の真照寺等への往還には平松家を宿とされたという。先生の話では老師はいつも来られるときはお一人頭陀袋に黒衣姿で汽車は三等車を愛用、話は大声で全力投球、軽妙洒脱で禅機に満ちていて誰ひとり居眠りをする聴衆はいなかったそうだ。ある年、平松先生が一身田での公会堂で老師の講演会を開きその看板に「一身田が生んだ禅の第一人者沢木興道老師来る」と書いたら、それを見た老師が「あれはいかん、だめじゃ」と一喝された。先生はそのとき今なら「宿無し興道、故郷に現れる」と書くべきだったか、といて笑われた。

また、これは最近知ったことだが興道老師は戦前二回私の母校神戸高校の前身旧制神戸中学校へ講話に来ている。正確には昭和 16 年 11 月と翌 17 年 11 月の二回で演題は「禅と自己」「日本精神と禅」。このことは当時生徒であった郷土史家川出和彦先生からの教示で同窓の彫刻家中村晋也先生もそれを聴きその後の人生の指針になった話として記憶されていたそうだ。

興道老師の名言、格言は数多くあるがなかでも老師は常々「人間の生まれた甲斐というものは、何も位の高くなることや、うまいものを食うことや、出世することやら、金の番人になることではない」と戒められた。この言葉は戦後七十年が過ぎた今の私たちに真の幸せとは何かをもう一度心静かに見つめ直し、問いかけているのではないかと思う。少なくとも私の中の興道老師はいつもそう直言しておられるように思っている。

◆「ことば」について思う

板橋興宗 (御誕生寺住職 越前市)

人間だけが文明社会に生活しています。人間以外の動物は、大自然の中に順應して生きているだけです。文化生活はありません。



人間は、自動車、飛行機、冷暖房機など、つぎつぎに考案しつづけています。それは「言葉や数学」をうまいこと使いこなし、生活に便利な世の中にするよう、さまざまに努力しているからです。

その反面、人間だけが「言葉」を「言刃」にして、ノイローゼになったり、自殺までします。それは「言葉」であれこれ考え過ぎることが原因です。

それでは「文明社会」に楽しんで生きる秘訣はどこにあるのでしょうか。それは言葉でいろいろ考えることを少くし、「からだ」がわかっている生き方を知ることにあります。それには毎日の生活や仕事に黙々と真心を注いでいることです。

その基本を学ぶために、「読経や座禅」があるといえましょう。(平成 28 年新春)



《伊勢の津七福神友の会事務局》

〒514-0033 津市丸之内 27-16 高山神社内

電話：059-225-8558

編集後記：10号・記念号です。ご意見、原稿などお寄せ下さい。

池上 kanon@nifty.com